

ドバイで思う国の舵取り

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役 土田 浩

2月にアラブ首長国連邦(UAE)の二大都市・ドバイとアブダビに旅行してきた。

ペルシャ湾岸に位置するドバイには、世界一高いビル(ブルジュ・ハリファ、160階・828m)、世界一広いショッピングモール(ドバイ・モール)をはじめ、超高級ホテル群・邸宅地、世界的なスポーツ大会・競馬レースなど、カネに糸目をつけずに現代の贅を尽くした施設・イベントが目白押しである。それらは世界の観光客を楽しませるだけでなく、世界中から高給取りの事業家・実務家を引き寄せているのである。

UAEの人口900万人のうち、国民は僅か100万人。残り800万人は他国籍の働き手とその家族である。建設・運輸や小売・サービスなどの労働者層に限らず、企業経営者・ビジネスマンや弁護士・医師などの高度専門職も、大半が外国人なのである。高報酬・高待遇の求人需要が多く、所得税もかからないため、米国では海外就労地の人気ナンバーワンと言われている。

治安の良さ、街の清潔さも特筆に値する。今回の旅行のガイドとドライバーは、エジプト、インド、パキスタン出身の中年男性であったが、皆、家族を母国に残して10年以上も単身生活とのことであった。UAEでは、仕事を失った外国人には居住権がなく、仮に逮捕などされようものなら二度とUAEには戻って来られないので、決して犯罪に手を染めたりしないのだと話してくれた。収入レベルは人それぞれながら、母国で働くよりは遥かに稼げるこの国に不満はない様子であった。

誰が地元民か分からないほど様々な顔立ち・身なりの人々が、普通に入り混じって会話して暮らしている光景。それはまさに映画・スターウォーズ第1作で見た砂漠の惑星の宇宙酒場さながらの光景であった。

言うまでもなく、こうした国づくりが可能だったのは、石油資源という地の恵みのおかげである。ただし、究極のグローバル資本主義国家とも言えるこの国のかたちは、決して成り行きで出来上がったものではない。「世界で一番でなければダメなんです」というポリシーで画期的な街づくりに資本を投下し、外国企業を積極的

に受け入れて中東の商業拠点に育て、イスラムの戒律は外国人には強要しないと決断したのは、国の根幹にかかわる壮大な成長戦略そのものであった。

それでは、少数派であるUAE国民は、この国をどう思っているのだろうか？ 先のサッカー・アジア杯UAE大会での熱狂的な応援ぶりには、並々ならぬ自国愛が感じられた。女性の黒装束・アバヤ、男性の白装束・カンドーラは、宗教上の理由だけでなく、自国民としてのアイデンティティを誇っているようにも見えた。経済的には、無償の教育・医療、政府・国営企業への働き口、外国企業への名義貸し報酬などなど、この上ない恩恵を享受している。先祖の過酷な砂漠での暮らしを受け継ぎ、精力的に国づくりを進めてきた世代にとって、今日の姿は夢のような成功物語に違いない。

ところが、皮肉なことに、恵まれ過ぎた環境下に生まれた若者世代では、規律を守らず、働く意志のない者が著しく増えてしまい、国の将来に暗い影を落としているのだそうだ。政府は、徴兵制を導入し、若者担当大臣を設置するなどの対策に乗り出しており、この問題の深刻さが窺われる。

この国も、今日に至る道のりは決して平坦ではなかった。リーマンショックの翌2009年、金融債務の返済繰り延べを要請した「ドバイショック」は、世界の投資家を震撼させた。その危機を救ったのはUAEの盟主・アブダビであった。その首長の名を冠した「ブルジュ・ハリファ」の展望台からの眺め。ドバイが砂漠の一角に作られた人工都市であることを実感できる。ドバイは今、EXPO2020に向けて更なる建設ラッシュの真最中である。果たして、この国の近未来には何が起こるのだろうか？

国づくりは永遠に未完である。繁栄の持続には、絶え間なき前進と変革が必須なことは、世界史が証明する通りである。しかしながら、歴史上多くの大国がそうであったように、国民が豊かさを謳歌し、現状維持に躍りになったとき、取り返しのつかない衰退が既に始まっているのである。改めて国の舵取りの難しさを思わずにはいられなかった。